



## 指導者研修会

## 学校公開を終えて

青少年赤十字耶麻地區指導者協議會長  
喜多方市立山都小學校長

十月十九日、紅葉が見頃を迎えた西会津町で、県内外から三百名ほどのご参加をいただき、JRC指導者研修会・学校公開が行われました。参加されたみなさんの感想を拝見させていただき、「とても勉強になつた」「すばらしい実践だった」等、良い評価をお寄せくださいました。とてもうれしく思いました。

いただきたいという願いがありました。日程の都合で十分な時間を設定できなかつた面はあります。それぞれの学校で今回の研究協議が生かれ、より効果的な取り組みを行つていただければ幸いです。

また、各分科会の指導助言者の皆さんから、全体会の中で、各分科会の内容を紹介していくだけたことは、他の分科会の様子を知ることができ、大変参考になりました。

午後の基調講演は、千葉県支部赤十字奉仕団指導講師、稲積修先生に「青少年赤十字と学校教育」という演題で行つていただきました。青年赤十字の歴史やその取り組

「ができました。また、JR  
Cの先見性は今後益々、学校  
教育の中で大切な役割を担つ  
ていくことについても納得す  
ることができました。  
「気づき」「考える」「実行す  
る」そして「振り返る」。こ  
の言葉の持つ、意義深さを今  
回の研究会を通して、改めて  
考えさせていただきました。  
また、「地域に根ざす」「地域  
人材の活用」という視点も、  
児童生徒を深い学びに引き込  
むには重要な要素であること  
を学ばせていただいた研究会  
でした。

今にして思えば、わたくし、船長の見通しの甘さから、ずいぶん遠回りをしてしまったと感じています。船頭、船員、なにより乗客に不利益を与えたしまったのだろうと思います。言い訳になってしまいますが、平成二十九年四月に本校に赴任したときには、町を挙げての小中一貫教育の推進、そして、この青少年赤十字の推進校という、二つの事業をすべて小中学校で足並みをそろえて進めなければならぬいという、なかなか難しい状況



## 青少年赤十字研究推進校として

## 西会津町立西会津小学校長

岡崎秀明

そこで私は、私の持論を基盤として、負担軽減を優先して、「学校で一番大切なのは授業である。青少年赤十字の研究を授業を通して行う。その他に、年一回の小中合同ボランティア活動と、小中合同避難訓練を実践に組み込む。」としてしまったのです。

今思えば明らかに間違っているのですが、日本赤十字社福島県支部のみなさまや、前年度推進校の校長先生のご指導から、これが間違っている

ティア活動と、小中合同避難訓練を実践に組み込む。」と  
してしまったのです。

今回は、小・中学校共に「教育課程」「授業の在り方」「教師の姿勢」という三つの視点で分科会を運営させていただきました。これは、JRCを設けたものであり、自校の実態や課題解決のヒントにして学校教育に生かす糸口として分けたものであります。午後の基調講演は、千葉県支部赤十字奉仕団指導講師、稻積修先生に「青少年赤十字と学校教育」という演題で行っていただきました。青少年赤十字の歴史やその取り組みを知ることで、大変参考になりました。

西会津小学校・西会津中学  
校のすばらしい実践と、丁寧  
なご指導を頂戴した指導助言

すべて小中学校で足並みをそろえて進めなければならないという、なかなか難しい状況

みについてお話をいただく中  
で、JRCの取り組みは、学  
青少年赤十字  
福島県指導者協議会  
日本赤十字社福島県支部  
〒960-1197  
福島市永井川字北原田17  
TEL024(545)7998

---

人間を救うのは、人間だ。  
Our world. Your move.

者・講演者の方々、熱心に協議に加わっていただきましたご参会の皆様、そして、多くのご指導、ご支援をいただきました、福島県教育委員会様、福島大学様、喜多方市・西会津町・北塩原村各教育委員会様、青少年赤十字福島県

秋の日暮れは早く、紅葉した山々はすでに暗闇の中にありました。しかし、明るく晴れやかな気持ちでこの一日を振り返りながら、西会津町を助奉仕団様に深く感謝申し上げます。



編集発行

青少年赤十字  
福島県指導者協議会  
日本赤十字社福島県支部  
〒960-1197  
福島市永井川字北原田17  
TEL024(545)7998

人間を救うのは、人間だ。  
Our world. Your move.

と気づくまでに結構時間がかかつてしましました。

間違いに気づいてからは、青少年赤十字の考え方を学び、すべての学校教育活動で青少年赤十字の考え方を踏まえた実践を行うことができるように、全面的に計画を改め、授業が中心だった研究の柱を「教育課程」「授業の在り方」「教師の姿勢」とし、それについて具体的な実践事項を定め、それを共通理解して全教職員で実践を進めてきました。

「教育課程」では、学校教育目標に「気づき、考え、実行する」という青少年赤十字の態度目標を組み入れ、青少年十の理念を実現する取り組みを学校教育目標を実現する取り組みそのものにし、すべての教職員で共通理解して実践することができるようになります。

「授業の在り方」では、本校が従来から取り組んできた授業改善の三つの視点「児童自らの問い合わせ、学びの価値付け」の場づくり、学びの価値付けと「気づき、考え、実行する」を関連させて授業改善に取り組めるようにしました。

青少年赤十字指導講師である、土屋悦男先生のご指導を受けながら、すべての学校教育活動で青少年赤十字の考え方を踏まえた実践を行うことができるように、全面的に計画を改め、授業が中心だった研究の柱を「教育課程」「授業の在り方」「教師の姿勢」とし、それについて具体的な実践事項を定め、それを共通理解して全教職員で実践を進めてきました。

青少年赤十字の研究指定校として、平成二十九年度から二年間、研究を進めてまいりました。この二年間の成果は、とても大きいものと確信しています。なぜ、そのように思えることができたかというと、子どもたちの目の輝きが以前と全く違うからです。

この研究がまだ、軌道に乗っていないときは、どの先生方も「子どもたちが動かない」と言つていました。教師が言わないと動けない子ども

## 青少年赤十字が私たちに もたらしたもの

西会津町立西会津小学校  
研修主任 生江和枝

「教師の姿勢」では、私たち教師は、何らかの方法で児童の行動を促しつつも、基本的には、児童が「気づき、考え、実行する」ことを「待つ」、そして、気づきによる自主的な行動が見られた時に、大いに褒め、認める、という姿勢で指導することを確認して指導に当たりました。

教師の指導が変わったこと

で、児童に、人道の精神に基づいた言動が数多く見られます。ようになつたことが、推進校の指定を受けて取り組んできます。最後に、この場をお借りして、ご指導をいただきまし多くのみなさまに御札を申し上げます。ありがとうございます。

「ありがとうございます」というの花」を贈るのです。友達からもらう子どもの表情は頬がほころび嬉しそうです。



青少年赤十字の態度目標も、これまで教師が手をかけていたのです。青少年赤十字の研究指定校として、平成二十九年度から二年間、研究を進めてまいりました。この二年間の成果は、とても大きいものと確信しています。なぜ、そのように思えることができたかというと、子どもたちの目の輝きが以前と全く違うからです。

青少年赤十字の態度目標「気づき」「考え」「実行する」を含言葉に、子どもたちだけとまで教師が手をかけていたのです。

青少年赤十字の態度目標「気づき」「考え」「実行する」を含言葉に、子どもたちだけではなく教師も動き出しました。子どもたちが自ら気づくために、教師はしきけをつくり、待つことを心がけました。授業で「気づき」「考え」「実行する」ことが授業で活かされれば、さらに学びは深められることにも気づかされました。

教師からだけの価値づけではなく、子どもたち相互の価値づけも行いました。それは、子どもたちの輝いた目と活き活きとした行動

青少年赤十字の態度目標「気づき」「考え」「実行する」を含言葉に、子どもたちだけではなく、子どもたち相互の価値づけも行いました。それは、子どもたちの輝いた目と活き活きとした行動

で、児童に、人道の精神に基づいた言動が数多く見られます。ようになつたことが、推進校の指定を受けて取り組んできます。最後に、この場をお借りして、ご指導をいただきまし多くのみなさまに御札を申し上げます。ありがとうございます。

「ありがとうございます」というの花」を贈るのです。友達からもらう子どもの表情は頬がほころび嬉しそうです。

青少年赤十字の研究は、子どもたちの主体性を育成するためのエキスが詰まつたもので、実は、これが本来の学校教育が目指すものだと思いません。実は、これが本来の学校教育が目指すものだと思いません。西会津小学校では、子どもたちの奉仕の心を育てるために、VST(ボランタリーサービスタイム)と称して、他人のために自分ができることを進んで行っています。「先生、VST楽しいです。」「子どもたちの声、表情は明るいです。ついには、VSTの時間だけでなく、休みなどをする子が出てきました。授業で学んだことが日常生活に活かせるように、逆に日常生活で実践してきたことが授業で活かされれば、さらに学びは深められることにも気づかされました。

青少年赤十字の態度目標「気づき」「考え」「実行する」を含言葉に、子どもたちだけではなく、子どもたち相互の価値づけも行いました。それは、子どもたちの輝いた目と活き活きとした行動

から見て取れます。今まで教師が歯がゆい思いで見ていた子どもたちは、教師が何も言わなくても自ら学級を良くするためには友達の前に立ち提案

今日も、元気な子どもたちの姿が西会津小学校のあちこちに見られます。

度を身につけてきたことを、強く実感することができました。また、参加された多くの皆様からお褒めの言葉をいただき、生徒も教員も自信となりました。

その後、十一月三日に文化祭が行われました。JRC学校公開からわずか一週間という短時間での準備に、これまでのようないい文化祭にできるのかと、誰もが心配しました。しかし、JRC活動で培われた主体性と行動力、そして、

団結力は、その不安を見事に吹き飛ばし、大成功を収めることができました。あらためて、生徒一人ひとりの成長を実感し、その力が本物になつてきましたことを確信しました。

学校公開が一つの節目となりましたが、ゴールではありません。青少年赤十字の基本理念と態度目標の実現に向けて、皆様から頂戴したご意見やご指導をもとに、改善工夫を加えながらさらなる教育活動の発展に努めて参ります。

まず、研究主題に迫るための柱を立てました。それが「知・徳・体」です。①「知」、「徳」、「体」言語活動を共通項として、生徒の基礎力を育てる取り組み。②「徳チーム」道徳教育をメインとして、学活と連携したSSTやLSTなどのトレーニングを取り入れ、親和性や協働性を育てる取り組み。③「体チーム」異世代間の交流を生かし、意見を交換し、さらにフィードバックを繰り返しながら、より良いコミュニケーションの取り方を考え、身につける力を育てる取り組み、という三本柱です。根底には生徒たちの主体性を伸長させるための教師の姿勢「待ちの姿勢」を置きつ

## 気づき・考え・実行できる



西会津町立西会津中学校長

五十嵐  
正彦

# JRCの培うもの

西会津町立西会津中学校

研修主任 佐瀬裕子

# JRCの培つもの

## 西会津町立西 研修室

西会津町立西会津中学校

研修主任 佐瀬裕子

西会津小・中学校では、日本赤十字社福島県支部研究推進指定校として、平成二十九年度から二年間、青少年赤十字活動の研究を進めてまいり

会・学校公開では、「地域ボランティアの充実を目指す上で、大変有意義なございました。

卷之三

町立西会津中学校  
研修主任 佐

壬午  
佐瀬裕子

す。根底には生徒たちの主体性を伸長させるための教師の姿勢「待ちの姿勢」を置きつ



青少年赤十字の研究指定をお受けして、その深遠なる理念に触れ、を目指すものの不変的な価値や崇高さを、ことあるごとに感じました。様々なかたちで天変地異が日本列島を襲う中、人々を救うのはやはり人のつながり、温かさです。そして、そうした「人道」や「奉仕」の心こそが、生徒たちに生きる力を与えてくれるものではないかと思います。それ

を学校生活の中で育むことが  
できたら……という願いがあ  
ります。そこで、JRCの理  
念を表現するために、日常生活  
そのものを感謝や思いやり  
の気持ちを醸成し、行動につ  
なげる場にしようと、「気づ  
き、考え、実行する生徒の育  
成」→地域理解を深め、地域  
との交流を柱とした実践を通  
して→という研究を進めて参  
りました。

つ、それぞれが柱となる研究を進め、生徒の力を検証する場面として、生徒たちが自分の住む地域にふさわしい活動を、地域の大人の方と相談して模索、計画し、実行まで行う、「地域ボランティア活動」を設定し、この成果を発表することにしました。

二年間の活動を振り返ると、当初は戸惑いもありました

たが、生徒たちは「気づき、考え、実行する」姿を見事に

体現していきました。その成

長の大きさに、時には感動す

ら覚えました。それは、「地

域のみなさんのために自分が

できることはなんだろ」とお

世話になっている西会津町の

ために」という、「恩返し」「奉

仕」といったJRCの理念に

基づく気持ちが原動力である

ことは言うまでもありません。

発表でも、生徒たちは主

体性と実行力の高さを見せ、

我々教職員は全く憂慮せずに

見守ることができました。そ

うした変容は、理念に基づく、日々の実践の積み重ねの

成果だと胸を張ることができ

ます。それを目の当たりにし、「生徒の力を信じ、待つ姿勢」

「JRCの理念が培うもの」の価値を痛感せずにおられ

ません。

生徒たちの地域愛は芽を出しました。これからどんな愛情の花が咲くのか、豊かな実がなるのか、楽しみでなりません。このような成果が得ら

## JRC活動は私たちの財産

西会津町立西会津中学校

三年 水野美知

JRCの活動を通じ、様々

な場面で「気づき、考え、実

行する」ことができた二年間

だつたと思います。中でも、

地域ボランティアを自分たち

で企画、運営、実行すること

で、たくさんのことにつづき

ました。

特に、私が生徒会長という

立場で、西会津中学校の全校

生が成長したと思う部分は、

相手のことを考える、「コミュニケーション能力」です。

以前の私たちはコミュニケーションの取り方が上手ではありませんでした。聞かれたことに対しても、答えることができませんでした。それが、学年や学級を超えた異世代と話し合って活動内容を

されたのも、これまでご支援ご指導いただきました皆様のおかけだと思い、このような研究の機会をいただけたことに、深く感謝するばかりです。心より御礼申し上げます。

これまで、不安を抱えて臨んだ地域ボランティア活動。そうした経験の一つ一つがステップとなつて、お互いに話す決めていくことなど、本当にできるのかと、誰もが不安を抱えていたものです。

私自身も、生徒会長として説明やアドバイスが上手に伝えられず、不安を感じて悩んでいました。けれども、この活動を通して、先生にアドバイスをいただいてちゃんと説明したい、と思うようになつたのです。そして工夫すればするほど、みんなが真剣に話を聞いてくれ、地区の活動に生かして、積極的に活動してくれるようになりました。なんとも言えない、じわっと胸が熱くなるようでした。

「みんなが喜んでくれることもできませんでした。それは何だろう。」「自分たちも一緒に楽しめることがあります。それをして、一緒に楽しめることをしたい

ね。」などとアイディアを出し合い、練り上げた企画。「果たしてこれでうまく伝わるか」と、何度も話して決まった内容の伝え方や当日の進行の仕方など、不安を抱えて臨んだ地域ボランティア活動。そうした経験の一つ一つがステップとなつて、お互いに話す態度、表情、声などがどんどん変化していくのがわかりました。

「私たち西中生がレベルアップしている。」

そう実感できたのは夏休みの中間発表会です。まだまだ未完成でしたが、時間も動きもピタッと合わせることができました。

私たちの発表に、見に来てくれた先生方から、たくさんのお褒めの言葉をいたしました。

区、家で小道具を作つてくる地区。それからの二ヶ月は一生懸命頑張りました。そして本番。自分たちも満足できる発表をすることができました。

しかし、私たちの発表は、今まで支えてくださったたくさんの方々のおかげで成功することができたのだと思いました。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。大変なことはありましたが、この経験は私たちの人生にとつて大きな財産です。たくさんのがづきによって成長できた、貴重な活動となりました。



# 青少年赤十字作品募集 『詩・100文字提案』



青少年赤十字作品募集は「青少年赤十字活動の活性化と意識を高めること」を目標に、平成十八年度から今年度で十三回目の募集となります。平成二十四年度からは、海外の赤十字から寄せられた救援金で行われている「東日本大震災復興支援推進事業」の一つとして実施されています。

今年度は五十三校から四千四百八十七作品の応募がありました。審査は予備審査から第二次審査まで述べ六十数名の審査員の方々により、作品一つひとつに込められた思いを受け止めるべく慎重に行われ各賞が決定しました。

今年度も積極的に応募いただいた学校、適切なご指導を頂きました指導者の方々、進んで応募頂いた児童生徒の皆さんに感謝と御礼を申し上げます。

青少年赤十字作品募集は「青少年赤十字活動の活性化と意識を高めること」を目標に、平成十八年度から今年度で十三回目の募集となります。平成二十四年度からは、海外の赤十字から寄せられた救援金で行われている「東日本大震災復興支援推進事業」の一つとして実施されています。

今年度は五十三校から四千四百八十七作品の応募がありました。審査は予備審査から第二次審査まで述べ六十数名の審査員の方々により、作品一つひとつに込められた思いを受け止めるべく慎重に行われ各賞が決定しました。

今年度も積極的に応募いただいた学校、適切なご指導を頂きました指導者の方々、進んで応募頂いた児童生徒の皆さんに感謝と御礼を申し上げます。

## お姉ちゃん歩いた道

社長賞

郡山市立富田東小学校 五年 横山 知明



ぼくのお姉ちゃんが六年生の時、震災がありました。学年で、その道を家族と一緒に歩きました。寒くて遠い道のりでした。あの時のお姉ちゃんの気持ちを想像してみたけど、海はキラキラしていて周囲もすごく静かで、ピンときませんでした。お姉ちゃんは今でも海が好きです。何年後か町がもとどおりになつたらまた家族で住みたいです。

日本赤十字社 社長賞  
「わたしが感動したことばやできごと」

郡山市立富田東小学校 五年 横山 知明

今年の三月十日、

小学生だったお姉ちゃんが津波からにげた道を、いっしょに歩いた。

すごく寒くて長い道のりだった。当時の気持ちを想像してみたけどピンと来ない。

ただ、となりにお姉ちゃんがいて、うれしいと思つた。

## 皆が幸せな社会を目指して

須賀川市立第三中学校  
三年 鈴木 真優

「ヘアドネーション」は、

病気や事故で髪を失った子供

達に、寄付された髪の毛でウ

イッグを作り、無償で提供す

る活動です。ヘアドネーション

には、誰かのためにそつと役

に立つボランティアだと思

います。どこかで喜んでくれる

人がいるかもしれないと思つ

て過ごす毎日は張りがありま

す。「共に幸せになる」そん

なボランティアを目指し、こ

れからも続けていきたいです。

ンチメートル。  
髪をとかす度、誰かの役に立てるかも  
しれないと思える毎日が、  
少し嬉しい。青少年赤十字福島県指導者協議会長賞  
「わたしのふるさと」相馬市立日立木小学校  
二年 太田 瑞音

## そうまの海

相馬市立日立木小学校  
二年 太田 瑞音

## そうまの海

相馬市立日立木小学校  
二年 太田 瑞音今年 しんさい後  
はじめての  
海びらきとつもきれいな海  
すきとおつた海水  
さらさらのすなはまたくさんの人に  
きてほしいな  
そうまの海に今年は私が生まれてはじめて  
の海びらきでした。  
海びらきの日は、とつても  
天気がよく、たくさんの人が  
来ていました。水に入るとつめたくてとて  
も気持ちよかったです。  
私のお母さんは、むかし海  
の近くに住んでいました。「夏  
には海水よくにしおひがりと  
たくさん的人がそうまの海に  
あそびに来ていた。」という話  
を聞きました。私はその話を  
聞いて、そうまのきれいな海  
にまたたくさんの人気がきてく  
れたらいいなと思いました。

## 障がいがあるということ

福島県立平支援学校  
三年 谷 康大僕は障がいがあること  
が嫌だった。

でも、障がい者目線のボラ

ンティアをしていて、うちに、

障がいは気付いてくれる

ものだと思うようになった。

「僕だからこそ気付ける

ことを社会に発信する」

これが僕に出来るボラン

ティアだ。

しかし、JRCボランティ  
ア部に入り、ボランティア活  
動をしてその考え方が変わり  
ました。不便だと思っていた  
い理由は、  
「ヘアドネーション」に  
協力したいから。  
もう少しで目標の五十七障がいが、とびきりの相棒に  
なったのです。そしてこの相棒は僕に「気  
付き」という考動力を与えて  
くれました。僕はこの思いを  
多くの人に発信したいと思  
い、「一〇〇文字提案」に応  
募しました。

日本赤十字社 福島県支部長賞

郡山市立富田東小学校  
二年 林 咲空須賀川市立第三中学校  
三年 鈴木 真優郡山市立富田東小学校  
六年 志田 柚季白河市立白河第二中学校  
一年 ルモイン マノン白河市立白河第二中学校  
三年 太田 瑞音相馬市立日立木小学校  
二年 太田 瑞音福島県青少年赤十字賛助奉  
仕団委員長賞相馬市立日立木小学校  
三年 谷 康大福島県立平支援学校  
三年 谷 康大福島県青少年赤十字賛助奉  
仕団委員長賞福島市立福島第一小学校  
三年 谷 康大福島市立福島第一小学校  
三年 谷 康大福島市立阿武隈小学校  
三年 谷 康大福島市立富田東小学校  
三年 谷 康大福島市立富田東小学校  
三年 谷 康大福島市立福島第一中学校  
三年 谷 康大福島県立白河旭高等学校  
三年 谷 康大福島市立福島第一小学校  
三年 谷 康大福島市立福島第一小学校  
三年 谷 康大福島市立福島第一小学校  
三年 谷 康大福島市立福島第一小学校  
三年 谷 康大

## 受賞された皆さん

日本赤十字社 社長賞

郡山市立富田東小学校  
五年 横山 知明

学校奨励賞

福島市立福島第一小学校  
須賀川市立阿武隈小学校

十一月二十二日から二十五日までの四日間、青少年赤十字国際交流事業Tokyo 2018に参加させて頂きました。十のHRに分かれて高齢者社会・異文化共生・防災、災害対応の三つテーマについて

## 国際交流集会に参加して

福島県磐城第一高等学校 二年 高坂 伊織

十一月二十二日から二十五日までの四日間、青少年赤十字国際交流事業Tokyo 2018に参加させて頂きました。十のHRに分かれて高齢者社会・異文化共生・防災、災害対応の三つテーマについて

十一月二十二日から二十五日までの四日間、青少年赤十字国際交流事業Tokyo 2018に参加させて頂きました。十のHRに分かれて高齢者社会・異文化共生・防災、災害対応の三つテーマについて

十一月二十二日から二十五日までの四日間、青少年赤十字国際交流事業Tokyo 2018に参加させて頂きました。十のHRに分かれて高齢者社会・異文化共生・防災、災害対応の三つテーマについて

## 平成30年度 青少年赤十字国際交流集会

JRC/RCY  
INTERNATIONAL MEETING,  
“TOKYO 2018”

月社メンバーが、日本全国からの三十八名の青少年赤十字メンバーとオリンピックセンターで互いの活動の紹介や文化交流を行い青少年赤十字のリーダーシップを学びました。福島県からはいわき・相双地区から一名、指導スタッフとして二名の教師が参加しました。

また、集会に参加するアフガニスタンの赤新月社メンバー二名が福島を訪れました。十一月十七日から二十二日までの六日間、いわき地区を中心に、県大会への参加や被災地視察、学校訪問など福島県メンバーとの交流を深めました。



と/or に会場である国立オリンピックセンターの敷地内をツアーフォーマンスで回っていました。各ゲームでのポイント合計を競いました。トレセンで実施されているドローリングチャレンジゲームや、赤十字パズル、高齢者レクリエーションの新聞紙スリッパ飛ばしなどを行いました。

二十一カ国、半数が外国人で四日間を共に過ごすことになりました。初めはとても不安でいっぱいでしたが、語学奉仕団の方々や、先生、周りの方々にたくさん助けて頂き言葉の壁があつてもスムーズに話すことが出来ました。

二つ目はグループディスカッションです。私の班では災害前、災害発生時、発生後に何が出来るか、何をすべきかのアクションプランをたてるために話し合いました。災害問題としては洪水。水害の多い国や、逆に水不足の地域など日本ではみられないような問題もありました。最後に

十一月二十二日から二十五日までの四日間、青少年赤十字国際交流事業Tokyo 2018に参加させて頂きました。十のHRに分かれて高齢者社会・異文化共生・防災、災害対応の三つテーマについて

十一月二十二日から二十五日までの四日間、青少年赤十字国際交流事業Tokyo 2018に参加させて頂きました。十のHRに分かれて高齢者社会・異文化共生・防災、災害対応の三つテーマについて



アフガニスタン  
赤新月社メンバー  
福島訪問

十一月十七日土～十一月二十二日木

アフガニスタン赤新月社メ

ンバー二名が福島を訪れまし

た。宗教や生活習慣の違いな

ど戸惑う面もありましたが、

県大会への参加や被災地視察

など熱心に学び、学校訪問で

は積極的に福島のメンバーと

交流する様子が見られました。

ご協力頂きましたご家庭、

学校等関係各位に心より感謝

御礼申し上げます。

ありがとうございました。

そして、英語が通じなくても

お互いに理解し合おうとした

ことでコミュニケーションの大

切さを実感しました。この貴

重な経験を次に繋げ、ここで

学んだことをたくさんの人々に

伝えていきたいです。この様

な素晴らしい機会をいただきました。ありがとうございました。

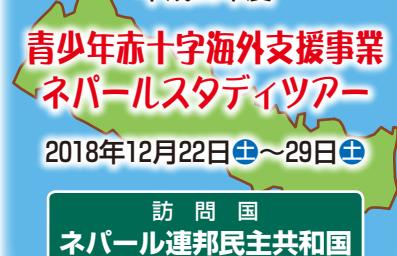
日本赤十字社では青少年赤十字活動資金(一円玉募金)を財源とした海外支援活動を行っており、平成二十九年度からはネパール赤十字社及びバヌアツ赤十字社を対象としています。

今年度、現地における実際の募金の使われ方や募金によって改善した現地の状況を確認すること、また支援対象国の青少年との交流を通じて「国際理解・親善」について実体験を通じた学びを得、国際社会においてリーダーシップを発揮する人材の育成を目的に全国から九名のメンバーが選出され派遣されました。

本県からは福島県立白河旭高等学校一年坂田実紀さんが参加しました。



一円玉募金で建てられた水道で手を洗う少女



2018年12月22日土～29日土

訪問国  
ネパール連邦民主共和国

## 県外の青少年赤十字メンバーによる 福島県被災地視察及び 高校青少年赤十字との交流研修

今年度の福島県青少年赤十字連絡協議会県大会には県外のJRCメンバーを招待し、10県から20名の他県メンバーが参加しました。

### 他県高校生とともに震災を考えた県大会

福島県高等学校青少年赤十字連絡協議会会長  
学校法人松韻学園福島高等学校 三年 森 龍太郎

東日本大震災以降、高校JRCは、年間スローガンに「つなぐ」、「伝える」、「発信・発進」等を掲げ震災の体験を他県に伝える活動をしてきました。そして今年は、他県のJRCメンバーを福島に招き、被災地を巡りながら震災当時の福島の様子、現在の福島の様子を実際に見てもらう県大会を開催しました。また、現在の高校生は、震災当時小学校二～四年生で当時の記憶がない世代になってきているので、震災の事を後世に長く伝えるために、福島の高校生自身も震災を学ぶことを目的とした県大会でもあります。春の総会で講師の先生から、「被災地には、震災の出来事を伝える『被災地責任』がある」と教えていただいたことを胸に刻んで県大会を実施しました。

今、参加した他府県のメンバーの意識は皆高く、特に、震災を考える良い機会になつたと思ふ。そして、今回の県大会での学びを忘れず、今後のJRCの活動に生かして行きたいと思います。

お忙しいところ原稿をお寄せいただきました方々、協力頂きました皆様に感謝申し上げます。



あ  
と  
が  
き



（略）

と思つていたが、実際に来てみるとそうでないことが分かった」という声を聞くことができたので、無事、福島の事を伝えることができたのではないかと思います。これから日本各地どこでも東南海地震が予想されていることを自分の県に持ち帰り伝えなければいけないという使命感を持って参加していました。研修では、コミュニケーション福島やいわきライブミュウじあむの展示から当時の様子を学び、津波語り部の方、農園の方、復興団地の方から復興の様子など、多くのお話を聞くことができました。これらは、福島県メンバーにとつても、同じ県内にいながら今まで知ることがなかつたことだつたので、今一度震災について考える良い機会になつたと思ふ。そして、今回の県大会のメインとなる情報交換会では、福島県メンバーが事前に下調べした震災に関することをブースに分かれて発表しました。どのブースに分かれて発表りあがつた声が上がり、県外メンバーからは、「福島はもうすっかり復興しているもの